

P T A 観 察 記

北 川 台 輔

アメリカが未だ成長過程にある国だといふことは教育の実際を見ても直ちに肯つける所である。終戦後の日本で米国進駐軍指揮のもとに教育制度の革正が試みられ、旧制から新制への過渡期に於て色々な混乱状態を来したということに留學生諸君をはじめ、心ある米人からも幾度となく訊いたことであるが、それと同じようなことが、ずっと穏やかな程度に於てではあるが、いつも米国自身に行はれつつあることを知らねばならない。

公立学校制度は米国憲法の精神に則つて各州の自治によって実施されており、従つて州が異れば教育の方針、制度、教師の報

酬その他に非常な開きがある。更にまた同じ州の中でも大きな都市になると、市会ので定める所によってボードオヴエデュケーション Board of Education があり、そのメムバーとして幾名かの市民が一般の投票によって選挙され、更に視学官を市の公費を以て任命して、公立学校の運営指導にあたらしめている。だから戦前の日本のように文部省で決定したことが三府四十三県の津々浦々に到るまで一様に実行に移されるというようなことは想像も出来ないことである。米国の公立学校の「父兄、教師会」(以下略してPTAと記す)はこの根本的な事実を背景として観察されなければなら

ない。

茲で私はその歴史や組織などについて語るうとするのではない。私がかこに取り上げて問題とするのは一体米国では誰が児童を教育するものであるか、という極めて地についた事柄なのである。先づ一つの例をとってみよう。

私がミネソタ州のミネアポリス市に行つてから余り間のない頃であつたが同市では当時米国でも屈指の視察官をミスミス失つたことがある。その理由は茲に詳述する余裕を持たないが要するに彼の教育方針が一口に言つて自由主義に過ぎるといふ一部分の人人の非難によるものであつた。彼が去つて、次の視学官が任命されてか同らもジグルーブの人々は同じような苦情を並べ立てていた。恐らく誰が来てと同様であろう。またこの一部の人々が満足するようない視学官だつたら教育の大道から言つて困つたものなのである。

そこで問題となるのはその一部の人々は誰であるかということだ。同市では住宅

税を以て教育費（学校の建物設備、教師の給料その他一切を含む）に充てているのであるが、年々増加する学童の数、それによつて生ずる教室教師の不足、物価騰貴による費用の膨張などによつて、住宅税を上げることが必要になる。そこで税金を払う方が仲々承知しない。結局現行の学校教育に色々非難をあげせかけて、その改良が行はれない限り税金を上げるなどは考えも及ばないというような議論が出て来るのである。

例へばこれはいつ二三年前のことであるが同じミネアポリスの公立学校でコムモン・ラーニング Commn Learning という一つの教育方法を試みたのである。それは古来の所謂「読み書き算術」——米国では之を「Three R と呼ぶ——だけでは到底今日の複雑な世の中に出て一人まいの市民となることは困難である。更にそれに加え色で専門的技術的教育を施したとしても、物理は物理、歴史は歴史、音楽は音楽として夫々に孤立し専門化された科目として教え

られている限り、すぐれた科学者すぐれた音楽家、すぐれた技師になる教育は出来ても、名実ともに立派な市民となり、両親となるという教育は出来ない。即ち極端に言へば身につけた知識や技術を自分の為には利用もし、悪用もするが、之を社会の為人類の為に活用しようという所謂公民としての自覚や責任感を持った人物になって呉れないのである。

この点、少くとも戦前の日本では、善かれ悪しかれ国民の教育ということが主眼であり教育勅語がその大綱であり、忠孝を以て日本人たるの道としていた為、所謂修身という「学課でない」科目があつて、結果に於ては恐ろしく狭いものになり終つたにせよ、ともかく公民教育ということは之が行はれていた。その方向と理想、それに到達する途と方法、すべてが余りにも手近か具体的にであつた為、日本人であることと世界人であることが或は相容れない矛盾になつてみたり、或はゴツチャになつて見境がつかなくなつたりしたことは事実であ

つたが、少くとも「忠良なる国民」を養成するということに公立学校の教育の眼目が定まっていた。

所が米国の場合は先づ憲法に於て祭政分離をハッキリとさせ、公立学校で宗教々育をするのは出来なくなつてゐる。建國以來公衆道德個人道德はすべて宗教に属するものと一般にきまつてゐた。而して社会一般から尊敬されるに足る人は誰でも何れかの教会に所属してゐるものとされてゐた。宗教は社会の道德を保存し、人倫の道を淨化するものとされ、学童は家庭とその所属する教会とに於て之を充分に与えられてゐるものとし、公立学校では宗教々育はおろか、日本の修身のようなことさえ一切ないのである。だから学校は知識の涵養と技術の修得をする所以の何物でもなかつたのである。

(つづく)

×

×

×

×